1　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。〈広島大〉　二〇一六年度出題

　さるほどに、姫君七歳と申す春の頃、桜の咲き乱れたるを御覧じ給へば、幼き者二人来たり遊びゐたａるを、三十ばかりの男、二十六七の女房来たりて、かの二人のを、をば男抱き、をば女抱きて帰りけり。姫君、御覧じて、「なる者ぞ」と御尋ねありければ、承り、「の二人の童どものためにはにて候ふ」と言ひければ、姫君、聞こし召され、「①何として自らには父ばかりありて母のなきぞ」とせければ、乳母、泣く泣く申しけｂるは、「君三歳の御時、アくなり給ひ候ふ」と申しければ、中将姫は聞こし召され、「今までも知らざりけるこそ悲しけれ」とて、急ぎ父の御前に参り給ひて、「②如何なる人にても母の形見と見奉り、慰みなん」と仰せければ、聞こし召され、「あまりに姫申すに」とて、その夏の頃よりに北の方迎へ給ふ。姫君はの母のごとく露ほども背き給はず、従ひき給ふ。

　その後、中将姫は貴き御僧をじ、浄土御経を受けさせ給ひ、毎日に六巻づつイあそばし、母のをひ給へば、父豊成も御いとほしみは限りなし。北の方はこの姫を憎み給ひて、常にはり給ふ。豊成聞こし召し、「③、の習ひぞ」と、ただに思ひ給へり。北の方は中将姫を失はん、明け暮れ案じ給ひけり。

　姫君、十三にもならせ給へば、容顔美麗にして天下無双の人にて渡らせ給へば、よりはに立ち給ふべき由、勅使、重なりければ、豊成も喜び給ひて、その御喜びは限りなし。Ａ北の方はからずし召し、人を語らひて、を着せ、束帯させ、中将姫の御へで入る由をさせ、豊成に仰せけるは、「姫君如何なる事も出で来ん時、『さぬ仲なれば』などと仰せられ候ふな。姫君の御方を忍びて御覧候へ」と、様々し給へば、豊成、ある日の暮れ方に、姫君の御方を北の方に御覧ずれば、二十ばかりの男、に折着たるがり出でけり。

　継母、豊成に仰せけるは、「日頃、が申しつｃるはか。女の身の習ひ、一人に契りを結ぶは世の常の事。ある時は冠を着、装束の人もあり。ある時は立烏帽子に直垂着たる人もあり。またある時は引ききたる者もあり。見れば、法師なり。かやうににえ給ふ事の儚さよ」と空泣きしつつ仰せければ、豊成聞こし召し、「人の持つまじきものは女子なり。母最期の時、④ちにいとほしみをなしつるほどに、如何にもして世にあらせんと思ひつるに、口惜しき振舞ひしけるこそ悲しけれ。にもなるならば、この事漏れ聞こえ、禁中の物笑ひは豊成が女子にはしかじ」と思し召し、を召し、「、紀伊国有田郡といふ所にてＢをねよ。後のをばよくよくせよ」と仰せければ、武士承り、「三代相恩の主君の仰せを背き申すに及ばず」とて、姫君を具し奉り、彼の山の奥に御供申す。大臣殿の御定の趣、詳しく申したりければ、姫君、聞こし召し、「Ｃ我、前世の宿業くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず。さりながら、少しのを得させよ。その故は、我七歳の頃より称讃浄土御経を受け奉り、毎日母にけ奉り、今日はいまだ読まず。つうは父の御祈りのため、且つうは母、・の御ため、または、自らがの先に掛かりなば、の苦しみをも免れ、浄土の道のともせん」と仰せられければ、Ｄ武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける。

（「中将姫本地」による）

注　受けさせ給ひ……教えを受けてよくお守りなさって。

讒奏し……人をおとしいれようとして、悪口を申し上げ。

頓証菩提……すみやかに悟りを得ること。

問１　二重傍線部ａ～ｃの「る」について、それぞれ文法的に説明せよ。

問２　波線部ア「儚くなり」、イ「あそばし」は、ここではどのような意味か。現代語の終止形でそれぞれ答えよ。

問３　傍線部①～④を、必要な語句を補いながら、わかりやすく現代語訳せよ。

問４　波線部Ａに「北の方は安からず思し召し、人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」とある。

１　北の方が「安からず思し召し」たのはなぜか。簡潔に説明せよ。

２　何のために、「人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」たのか。簡潔に説明せよ。

◎問５　波線部Ｂに「頭を刎ねよ」とある。豊成が姫を亡き者にしようとしたのはなぜか。六十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問６　波線部Ｃに「我、前世の宿業拙くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず」とある。

１　「人の偽り」とは何か。「人」が指す人物を明記して、具体的に説明せよ。

２　姫君は、「消えなん事力及ばず」とこの事態を受け入れる。それはなぜか。「前世の宿業」を解説しつつ、五十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問７　波線部Ｄに「武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける」とある。

１　「しばらく時をぞ移しける」とは、姫が何をする時間を取ったのか。具体的に説明せよ。

２　ここで、武士は何に心を動かされたのか。四十字以内で答えよ（句読点を含む）。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝存続の助動詞「たり」の連体形の一部

　　　ｂ＝過去の助動詞「けり」の連体形の一部

　　　ｃ＝完了の助動詞「つ」の連体形の一部

ａの文法的意味は「完了」でも可。

問２　ア＝亡くなる　　イ＝読誦なさる

イは「読経なさる」「お読みになる」も可。

問３　①＝どうして私には父だけがいて母がいないのか

　　　②＝どのような人であっても死んだ母親の身代わりと思い申し上げて

「死んだ」の意味がないものは減点２。謙譲の意味に訳していない

ものは減点２。

③＝Ａ北の方が姫君を憎むことは、Ｂ継子、継母の関係ではよくあることだ

Ａ＝５〔「北の方」と「姫君」両方なければ０。〕

Ｂ＝５〔「関係」はなくても可。〕

④＝一途に娘に愛情をかけていたので

「一途に」がなければ減点２。

「娘に」「姫君に」がなければ全体０。

文末が「から」「ので」などでなければ減点２。

問４　１＝自分がＡ疎ましく思う中将姫がＢ美しく成長し入内を求められるほどの幸福を得ることがＣねたましく思えたから。

Ａ＝３〔「憎んで」なども可。「疎ましく思う」がなければ減点１。〕

Ｂ＝４〔「帝の后として迎えられる」意味であれば可。〕

Ｃ＝３〔「快く思わない」なども可。〕

２＝Ａ中将姫が帝への入内を前にして他の男たちを通わせているように見せかけてＢ父豊成に姫の入内をあきらめさせるため。

ＡとＢがそろっていなければ全体０。

Ａ＝５〔「見せかける」内容でなければ０。〕

Ｂ＝５〔「入内させないため」でも可。〕

問５　Ａ大切に育てた姫君が複数の男を通わせて親の愛情を裏切り、さらにＢこのことで宮中の笑いものになることが許せないと思ったから。（59字）

Ａ＝５／Ｂ＝５〔「宮中」がなければ減点２。〕

問６　１＝姫君が複数の男を通わせているという作り話を、継母が父に讒言したこと。

「継母が」がなければ全体０。「讒言した」は「言った」なども可。

　　　２＝前世での自分の行いがよくなかったために、現世で継母に陥れられ殺されるのも仕方がないと思っているから。（50字）

前世の行いに触れていなければ全体０。「継母」はなくても可。

問７　１＝姫が亡き母、父、自分が成仏するために、毎日欠かさなかった読経をすること。

「読経」「経を読む」がなければ全体０。母・父・自分の成仏の指摘がなければそれぞれ減点２。「毎日欠かさなかった」がなければ減点２。

２＝Ａ最期の時も父母を思い、死の運命に動じず経を読もうとする姫の篤い信仰心と Ｂけなげさ。（40字）

Ａ＝６〔「父母への思い」「自分の死を受け入れていること」「信

仰心」を欠く場合それぞれ減点２。〕／Ｂ＝４

【現代語訳】

　そうするうちに、姫君が七歳と申し上げる春の頃、桜が咲き乱れているのをご覧になると、幼い子供二人が来て遊んでいるのを、三十歳ほどの男と、二十六、七歳の女が来て、先ほどの二人の子供を、男の子は男が抱き、女の子は女が抱いて帰った。姫君が、（その様子を）ご覧になって、「どういう者か」とお尋ねになったので、乳母がお聞きして、「あの二人の子供たちにとっての父母です」と言ったところ、姫君は、お聞きになって、「問３①どうして私には父だけがいて母がいないのか」とおっしゃったので、乳母が、泣く泣く申し上げるには、「姫君が三歳の時に、（お母様は）お問２ア亡くなりになりました」と申し上げたところ、中将姫はお聞きになって、「今まで知らなかったことが悲しい」と言って、急いで父の御前に参上なさって、「問３②どのような人であっても（死んだ）母親の身代わりと思い申し上げて、きっと心を慰めます」とおっしゃったところ、豊成はお聞きになって、「あまりに（切実に）姫君が申し上げるから（姫君の言うとおりにしよう）」と言って、その夏の頃から突然北の方をお迎えになる。姫君は本当の母のようにほんの少しも（継母に）背きなさらず、従いたいせつになさる。

　その後、中将姫は貴い僧を招き、称讃浄土御経（の教え）を受けてよくお守りなさって、毎日六巻ずつ問２イ読誦なさり、母の後世菩提を弔いなさったので、父豊成も（姫君を）いとおしく思うお気持ちは限りない。北の方はこの姫君をお憎みになって、いつもうとみなさる。豊成はお聞きになって、「問３③（北の方が姫君を憎むことは、）継子、継母の関係ではよくあることだ」と、ただ通り一遍のこととお思いになった。北の方は中将姫を亡き者にするはかりごとを、朝も夕も思案なさった。

　姫君は、十三歳にもおなりになると、顔立ち大変美しく天下に二人といないほどにおなりになるので、帝から后の位にお立ちになるようにという命令を伝える勅使が、何度も来たので、豊成はお喜びになって、そのお喜びは限りない。北の方は心おだやかでなくお思いになって、人を仲間に引き入れて、冠をかぶらせ、束帯させ、中将姫のお部屋に出入りするふりをさせて、豊成におっしゃったことには、「姫君にどんなことでも起こった時には、『継子と継母の関係だから（そのような悪口を言うのであろう）』などとおっしゃいますな。姫君の部屋をこっそりとご覧なさいませ」と、様々に（人をおとしいれようとして、）悪口を申し上げなさるので、豊成が、ある日の夕暮れ時に、姫君のお部屋を北の方と一緒にご覧になると、二十歳ほどの男で、直垂に折烏帽子を身に着けた者が退出してきた。

　継母が、豊成におっしゃったことには、「日ごろ、わたくしが申し上げていたことは偽りですか。女の身の習いとして、一人（の男）に契りを結ぶのは世の常の事です。（それなのに姫君のところに通ってくる男には）ある時は冠をつけ、装束の人もいる。ある時は立烏帽子に直垂を着ている人もいる。またある時は薄衣をひきかぶっている者もいる。見れば、法師だ。このようにたくさんの（男に）お会いになることの（姫君の）心の浅さよ」とうそ泣きしながらおっしゃったので、豊成はお聞きになって、「人が持つべきでないのは女の子だ。（亡くなったこの娘の）母の臨終のとき、問３④一途に（娘に）愛情をかけていたので、どのようにでもして世間での評判を得させようと思っていたのに、残念な振る舞いをしたことが悲しい。明日にもなれば、このことは漏れ聞こえ、宮中の物笑いは豊成の娘に勝るものはないであろう」とお思いになり、武士を呼び寄せて、「お前は、紀伊の国有田郡雲雀山という所で（姫君の）首を刎ねよ。（そして、姫君の首を刎ねた）後の供養を念には念を入れてしなさい」とおっしゃったので、武士は承って、「（私が）三代にわたって恩を受けた主君のご命令に背き申し上げることはできない」と言って、姫君をお連れ申し上げて、その山の奥にお供し申し上げる。（そこで武士が）大臣殿のご決定の内容を、詳しく申し上げたところ、姫君は、お聞きになって、「私は、前世の宿業が悪く、人の噓のためにあなたの手にかかり、死んでしまうことはどうしようもない。とは言いながら、少しの時間をください。そのわけは、私が七歳のころから称讃浄土御経をお受け申し上げ、毎日母の尊霊に供え申し上げ（てきたのだが）、今日はまだ読経していない（からです）。一方では父の（ための）お祈りのため、一方では母の亡き魂が、生死の迷いの世界を離れ、（仏道の真理を得て）すみやかに悟りを得ることができるように、または、自分が剣の先にかかって（死んで）しまうならば、修羅の苦しみをも免れ、浄土へ（行くため）の道しるべともしよう（と思うからです）」とおっしゃったので、武士は、岩や木（のように心がない存在）ではないので、しばらく待ってくれた（のだった）。